平成 30 年 4月 15日（日） 朝日新聞 掲載

介護の担い手 留学生挑む

専門学校北海道福祉大学校に5人入学

介護分野での人材不足を背景に外国人の在留資格に「介護」が加わったのを受け、札幌市中央区の「専門学校北海道福祉大学校」にこの春、外国人留学生5人が入学した。2年間学んで専門的な知識や技能を身につけ、介護福祉士の資格取得を目指す。

入学式に出席したヨハンさん（中央）とノーフィーさん（右）＝札幌市中央区の市民ホール

2年間学び、国家資格めざす

外国人の介護職での受け入れを広げるため、2016年に出入国管理及び難民認定法（入管法）が改正された。「留学」の在留資格で来日した人が国内の専門学校などで学んで介護福祉士の国家資格を取れば、「介護」の在留資格に切り替えて介護現場で働けるようになった。介護施設によっては、海外に出向いて担い手を探し、日本語を習得する段階から支援する動きも出ているという。

5人の留学生を迎えたのは、同校の介護福祉学科。23歳～37歳の男性3人、女性2人で、インドネシアから3人、中国、韓国からが各1人。いずれも日本語の授業を受けられる日本語力を身につけているとして受け入れを決めた。

このうちインドネシア・バリ島出身のニ・プトゥ・ノーフィー・プラサンティさん(25)は大学で日本語を学び、介護の分野に関心を持った。「インドネシアでも将来はお年寄りが増える。日本の介護施設で働いてノウハウを学び、将来はインドネシアで老人ホームを開きたい」と話す。

同じくバリ島出身のプトゥ・ヨハン・プトラ・ウィラワンさん(26)も老人ホームを持つのが目標だ。「介護をした経験はまだないが、食事のときお年寄りに食べさせてあげるなど、やさしく接したい。そのためにも頑張って勉強したい」と語った。

入学式は11日、同校を運営する吉田学園グループの専門学校7校合同で、中央区の市民ホールであった。新入生や保護者計約1500人が出席し、ノーフィーさんとヨハンさんもスーツ姿で臨んだ。吉田松雄理事長は「吉田学園で学ぶスキルは、皆さんにとってこれからの社会で大きな武器になる。健闘を心からお祈りします」とあいさつした。

（片山健志）